

65 兵庫県内在住視覚障害者の運動・スポーツ実態調査 －神戸視力障害センター及び視覚特別支援学校卒業生を対象として－

神戸視力障害センター 細川健一郎

I 目的

体育授業を「生涯にわたり運動・スポーツの実践ができる知識、技能、態度の習得」という視点から評価し、今後の体育授業改善の一助とするため。

II 研究方法

1. 調査対象 本センター就労移行支援課程，兵庫県立視覚特別支援学校職業訓練課程，神戸市盲学校職業訓練課程の卒業生各 100 名（合計 300 名）
2. 調査期間 2010 年 9 月～11 月末
3. 調査方法 点字・墨字による郵送調査（返信用封筒同封）
4. 回収結果 71（回収率 23.7%）

III 調査結果の概要

1. この 1 年間の運動・スポーツの実施について

この 1 年間に何らかの運動・スポーツを行った者の割合は 60.0%であった。これは、世論調査より有意に低いものであった。行われた運動・スポーツは、「ウォーキング」が最も多く、以下、「体操」、「ジョギング、ランニング」などの順となっている。また、この 1 年間に実施した種目数と視力階級別分布には正の相関が見られ、視力の低い人は高い人に比べて、実施する運動・スポーツ種目数が限定的になることが示唆された。

2. 体育授業が修了・卒業後の運動・スポーツ実施に対して役立っているか

この 1 年間に運動やスポーツを行ったとした者に対して、在学中の体育の授業が、運動・スポーツ実施に役立っているかどうか聞いたところ、「役立っている」とした者の割合は約 80%になり、生涯スポーツの点から評価できるものであった。

3. この 1 年間に運動・スポーツを行わなかった理由

この 1 年間に運動やスポーツを行わなかった理由を世論調査と比較してみると、「場所や施設がないから」、「仲間がないから」、「指導者がいないから」、「機会が無かったから」の各項目にはそれぞれ高い有意差が見られたことから、これらは視覚障害者により多く見られる特徴的な実施上の障壁になり得ることが示された。

4. 今後の運動・スポーツの実施希望

今後、運動やスポーツを行いたいか聞いたところ、「行いたい」とした者の割合は 88.3%、「行いたくない」とした者の割合は 11.6%となった。今後行いたい運動・スポーツ種目は、「ウォーキング」が最も多く、以下、「体操」、「ジョギング、ランニング」などの順となっている。

IV 考察

現状及び今後の希望などを勘案し、体育の授業内容を再考する必要がある。加えて、視覚障害者特有の運動・スポーツ実施上の障壁を軽減し、世論調査並みの実施率にするためには、教育上の配慮に加え、地域社会との協働・連携による対応が必要である。